

核関連広報施設を見る

——六ヶ所村・東海村訪問記

五味渕 典嗣

1 核を〈見せる〉場所

この夏、核関連広報施設を見に行こうと思った。それはべつに、

いくつかの戦争博物館を取材しながら、若者代表という語りの位置が自らの知的な緊張感の欠落を正当化してくれる。とでも言ひ

たげな古市憲寿『誰も戦争を教えてくれなかつた』（講談社、二〇一三）に刺激を受けたからではないし、生きた人間の血が通つているからこそひとの情動を揺さぶりもする場所の記憶と向き合うことを、悲しみという感情の消費に置き換えてしまつて疑わない東浩紀らの『チエルノブイリ・ダークツーリズム・ガイド』（ゲンロン、二〇一三）の向こうを張ろうと思つたからでもない。戦前・戦時期の日本における言論統制・情宣戦略・メディア政策と文学・文化のかかわりに関心を寄せる者として、「戦後もつとも成功したプロパガンダ」（本間龍『原発広告』亜紀書房、一〇一三）という声さえある、核をめぐる広報の現場をこの目で実見してみたい、と考えたからである。

もちろん、こうした文章を公にするからには、もっと多くの場所を、もっとていねいに見た後に、しかるべき用意の上で起筆すべきであることは、わたしとて自覚している。だが、青森県六ヶ所村と茨城県東海村という、日本の核の歴史を考える上で決定的に重要な二つの場所で感じた印象が新鮮さを失わぬうちに、あくまで一人の訪問者という立場で見たもの／見えてきたものを書きとめることには、それなりの意義もあるのではないか。二〇一三年の現在、この二つの場所で核は、どんな施設において、どんな形式で、どんなストーリーのもとに見せられているのか。以下、わたしなりの観察と分析として、記述しようと思う。本文中に掲げた写真は、いずれもわたしが撮影したものである。

2 七月、六ヶ所村

七月上旬のある日。連日、西日本や関東の酷暑が報じられていたが、青森はまだ梅雨空だった。細い糸のような雨が降る中、かつては東北本線、いまは青い森鉄道の野辺地駅に着く。わたしは自動車を運転しないので、ここからは下北交通バスに乗り換えないければならない。一〇分ほどして駅前のバス停にやつてきたバスに乗りこみ、最寄りの停留所までの運賃を尋ねると、若い運転手さんがパネルを操作しながら、とてもていねいに案内してくれた。ところが、バス出発直後、その運賃箱に思わずトラブルが発生する。一番前の座席に座つた初老のおじさんが両替をしようと一〇〇〇円札を投入したところ、機械がうんともすんとも言わなくなつてしまつたのである。運転手さんは信号待ちのたびに、まる

で昔のテレビの直し方のように容赦なく運賃箱を叩くが、空回りするモーターの音がするだけで、事態は一向に改善しない。誰も乗り降りしない停留所の前でおもむろにバスを停めた運転手さんは、バス会社に電話をかけるが、どうやら機械自体が壊れてしまつたようだ。修理のためには、一度車庫まで戻る必要があるらしい。

おじさんは、後ろに座つたおばさんに事情を説明している。小銭が一〇〇円足りなかつたので、両替しようと思つたのだけれど。乗客がいる以上ともかくバスは走らせねばという職業的な義務感からか、再びハンドルを握つた運転手さんが口をはさむ。

「どこまで行くの？　どこから乗つたつけ？」

おじさんが説明を繰り返す。「ああ、そんならバスが悪いんだから、一〇〇円負けとくよ」と言う運転手さんに、おじさんは声のトーンを一つ上げて、「そんことしたら、他のお客様に申し訳ないべさ」と答えていた。どうやら雨は上がつたものの、どんよりとした曇り空の下、バスは陸奥湾を臨む道から下北半島に入つていく。

くねくねとした山あいの道を抜けていくと、突如として、高圧線の鉄塔と巨大な風車の群れが姿をあらわす。バスは「弥栄平」という名前の停留所を通過する。工業団地のよう区画整理された平らな土地が視界いっぱいに拡がり、眞新しい工場や事務所らしき建物が点在している。この場所が、一九七〇年代初めに「むつ小川原開発公社」に狙い撃ちされたかつての開拓地だつたことは、鎌田慧さんの一連の仕事を読んでいなければ想像もつかなかつたろう。バスに乗るわたしは確かに見ていて、たぶん何も見

ていらない。いま見えているものにその土地の歴史や人間の記憶を重ねるためにには、最低限の作法として、それなりの準備と気構えが必要なのだ。おそらく、文学や文化の仕事の一つは、「いま・ここ」には見えないと感知する想像力と身体感覚を鍛え上げていくことにあるのだろう。ふと視線を転じると、重機が整地を行つている様子が目に入る。いつたい何度目の上書きになるのだろうか。ここではいまなお、造成が続いているのだ。

バスに乘ること約五〇分、最寄りの大石運動公園バス停に到着する。野球場三面、プール二つ、総合体育館とテニスコートを完備した総合運動場は、もちろん開発の「成果」であり「遺産」である。隣りには、実物大の竪穴式住居のレプリカなどで、この土地の古代の暮らしを伝える村立郷土館、向かい側にあるのが、目的の「六力所原燃PRセンター」である。過去、現在、未来の三点セットということか。

緑色に塗られた巨大な天体望遠鏡にも見えるPRセンターの受付には、デパートの店員さんのような制服を着た若い女性が座っていた。帰りのバスの時間を確認、一五時三〇分過ぎに来る便を逃すと、もう野辺地に戻るバスはない。展示物の写真を撮つてもよいか聞くと、そんな質問をする人はいないのか、ちよと問を置いてから「かまいません」と笑顔で応じてくれた。展示施設は入場無料である。

*

PRセンターは、地上三階・地下一階の四フロア構成である。上の二つが「原子燃料サイクル」全般の説明に、一階と地下一階が運営主体である日本原燃の事業を紹介するスペースとなつてい

る。まずは、順路の指示に従つて最上階へ。三階は、近隣の施設が一望できる展望台になつていて。

エレベーターから降りてすぐ、大きなガラス窓のすぐ近くには、『六ヶ所村ラブソディー』でも見た再処理工場の巨大な煙突が迫つている。そのすぐ横には、低レベル放射性廃棄物埋設センターとウラン濃縮工場が見える。わたしの目の前に置かれた地図のパネルが、再処理工場に隣接して、高レベル放射性廃棄物貯蔵管理センターや建設中のMOX燃料工場もあると教えてくれる。日本原燃のホームページによれば、これら五施設の建設には、およそ三兆円もの費用が注ぎ込まれていて。

窓の外から目を転じると、「原子燃料サイクル」の説明パネルとビデオがあつて、「原子燃料サイクル」とは「原子力工エネルギー」の「再利用できる」というメリットを有効に活用しようと「原子燃料サイクル」とは、MOX燃料化・プルサーム発電のことで、いわゆる高速増殖炉計画への言及はない。東日本大震災と福島原発事故を受けて設置されたと覚しき別の説明パネルには、再処理工場は地下二〇メートルの強固な岩盤まで掘りさげて建てられており、「推定される最大の震度にも耐えられる構造」になつていて、とある。しかし、ここで「推定される最大の震度」が、青森県東方沖プレート境界型地震でマグニチュード八・二五、直下型地震としてマグニチュード六・五であることは明示されていない⁽¹⁾。

二階は「サイクル・ステーション」というコーナー。宇宙ステーションをイメージしたのだろう、天井から赤や黄色の球体がぶら下がっている。外周部分には「環境世界地図」から始まり、地

球温暖化問題、エネルギー問題、それらを踏まえた「原子燃料サイクル」の取り組みについて、タッチ・スクリーンや模型を使って「わかりやすく」学べる展示が配置されている。その後、中央部分に「身のまわりの放射線」について教えてくれるコーナーが用意されている。

「環境とエネルギーの関わりや原子力工エネルギーについて遊びや体験を通して学べます」というパンフレットの惹句通り、このフロアの展示にはすべてクイズやゲームが組み込まれている。世界各国の二酸化炭素排出量ランキングやウランの埋蔵量ランキングなど、正解しなければすべての説明が読めない展示もあつて、時間がかかること甚だしい。途中、ウラン二三五に中性子を当て得点を競うというゲームがあつて、では、と挑戦するが、何度も操作の仕方さえ分からず、わかつたことは、制御棒に

中性子をぶつけられると高得点による妨害を避けてプルトニウムになる、というルールだけだった。



「身のまわりの放射線」という展示では、日本列島の自然放射線の測定マップが掲げられ、青森県は全国的に最も低いエリアの一つであると知らされる。わたしがメモを取りながら展示をいちいち確認していると、あとから来たグループが、何やら耳慣れぬ外国语で説明を受けていた。もちろん聞

きとれなかつたが、途中、日本語の「ここでは、放射線は自然界にも存在しているものであることをわかりやすく説明しています」という部分だけは、はつきり耳に残つた。この日の受付には

小さなベトナム国旗が掲げられていたから、もしかしたらその関係者だつたのかも知れない。気になつたので後で調べてみたら、日本政府とベトナム政府の原子力協定には、しつかりと「広報」分野での協力が明記されていた。こうしたP·Rセンターの技術と思想も、原発といつしよに「輸出」されるのだ⁽²⁾。

後半の二フロアは、再処理工場のプラント模型を中心に、日本原燃の六ヶ所村での事業を紹介するコーナーである。スイッチを押すと、使用済み燃料貯蔵プールから燃料棒を取り出され、機械音が鳴り響く中、剪断工程へと送られていく。バラバラになつた燃料棒に溶解処理を施し、プルトニウムを抽出する。もちろん模型とビデオ映像の組み合わせだが、それなりにリアルに作り込まれた使用済み燃料プールを上から眺め、至近距離で燃料棒を見つめていると、どうしても福島第一のプラントのことを思いだしてしまう。似たような印象は、低レベル放射性廃棄物の埋設ピットを紹介するコーナーでも感じられた。通路に沿つて歩いていくと、埋設ピットの地下の断面を見ることができるのだが、灰色のコンクリートの間に規則正しく並べられた黄色いドラム缶の群れを下から見上げたときの不気味さは忘れられない。まるで、核のゴミに覆い尽くされたディストピアとしての未来の地球を見ているような気分にさせられた。核にまつわる展示は、リアルなものほど、ひどくグロテスクなものになる。

3 八月、東海村

二世紀の日本国の大セントラルが六ヶ所村だとすれば、二〇世紀のそれは間違いなく東海村だろう。実験用原子炉JRR·1が初めて臨界に達してから半世紀以上、いまなおここには、日本原子力研究開発機構、日本原子力発電東海第二原発、東京大学大学院原子力専攻、核物質管理センター、J·I·PARC（大強度陽子加速度施設）などの施設が集中している。八月下旬の平日、いまは仙台まで行けなくなつてしまつた常磐線に乗つて、東海駅で下車。駅からはタクシーで、茨城県原子力協議会が運営する「原子力科学館」に向かつた。

その日は快晴で、やり切れないほどだつた東京の酷暑ほどではなかつたものの、まだまだ日射しが痛いくらいに照りつける。駐車場入口でタクシーを降りると、天狗のような大きな鼻の老人男性を象つたキャラクターがゆっくり回転している。E=mc²と書かれた緑色の衣装に身を包んだこの老人は、持参したパンフレットによれば、AINシユタインだそうだ。こんなに大きくて使つてしまつて肖像権の問題はないのだろうかと訝りながら中に入る³、展示スペース入口近くに、人工衛星「はやぶさ」についてのパネルが置かれてある。本間龍は、日本原燃と電気事業連合会が、二〇一三年三月、いくつかの東北の地域紙に「はやぶさ」に学ぶ青森そして日本への提言と題したカラー広告を掲げ、「失敗こそ成長のカギ」などと、思わず「厚かましい」ということばの最上級を探したくなるようなコピーを謳つていたことを紹介したが（『原発広告』参照）、確かに宇宙は、核をめぐる広報では重要

なキーワードになる。なぜなら、放射線は宇宙からも降りそそいでいるからだ。

細長い体育館のような展示スペースは、中二階ふうの空間と一階との二フロア構成である。順路に沿って中二階から入って行くと、廻廊部分から、一階の天井と壁面上部に横長に設置された巨大なスクリーンで、PR映像を見る仕組みになつていて。宇宙の起源、原子の発生、星のはじまり、地球の誕生、生物と人類の歴史と、まさに宇宙規模のストーリーが七〇八分ほどにまとめられていく中で、太陽の光と熱のエネルギーが他ならぬ「核融合」に由来するものだ、と紹介される。核エネルギーも放射線も、地球の始まる以前からすでにあつたし、いまもそうである、というわ



けだ。そう言えばパンフレットには、一階展示コーナーに世界最大級のクラウド・チャンバーが置かれていて、宇宙線をリアルタイムで見ることができる、と書かれていた。さらに映像は、二〇世紀の科学が、そのような核融合のエネルギーを利用できるレベルにまで到達したこと、「きちんとコントロールして安全に利用すれば」暮らしに役立つさまざまな応用が可能であると語つていく。最後に、科学の未来を担うのは君たちだ、と呼びかけられて、不惑を過ぎたわたしは、どうにもいたまれない気持ちになつた。一階に降りる。廊下には原子記号や自然放射線にかんするパネルや模型が並び、少し内側には半円形の研究室のような展示コーナーがある。ウラン鉱石のこと、放射線発見の歴史のこと、人間と被曝の関係など、正方形の小さなパネルや福引きのようなハンドルを動かして説明を読む仕掛けになつていて。中央には、空港の手荷物検査で使われる機械が据えられていて、(わたしたち)の身近でいかに放射線が活用されているか、縷々詳細に、じつに丁寧に説明されている。一問一答のクイズ形式や核にかかることばをちりばめたゲームなど、基本的なコンセプトは、六ヶ所村のPRセンターと違いはない。だが、どこか野暮つたいのである。ゲームはすべてアナログで(壊れていたものも)、指定された一部のドミノを倒さないように制御棒を挿入してドミノの動きをコントロールする「原子力ドミノ」のように、意図がよくわからないものもあつた。展示のコンセプトや語りの内容は理解できるのだが、原燃PRセンターに比べれば、広報施設としての完成度は決して高いとは言えない。ある意味でそれは、オーディエンスがこの空間で遊動的に振るまえる余地があるのである、ということでもある。

だが、必ずしもそのことは、展示空間の読みかえの可能性に直結するわけではない。

*

現在、東海村にはもう一つ、日本原子力発電の「東海テラパーク」という展示館がある。原子力科学館から国道二四五号線を北に向かつて歩くこと約二〇分、東海第二原発へと向かう道の入口に、地球に帽子をかぶせて表情を描いたキャラクター人形がこちらを向いて笑っている。「テラちゃん」と言うそうだ。

さて、を目指す展示施設はどこから入るのだろうかと、ロードローンによってジグザグ道にされた車道を歩いていくのだが、それらしき看板も建物も一向に見えない。あれよあれよといううちに、東海第二原発のゲートはすぐ目の前である。事前に大まかな位置関係しか把握していないわたしは、こちら側を向いて立つている警備員さんの視線を受けとめかねて少したじろぐが、それでも背中は見せられないと妙な意地を張つて、同行者に先んじて警備員さんに来意を告げると、「東海テラパーク」は原発敷地内にあるのだ、と教えてくれた。えつ、と意表を突かれたわたしが少しの間立ち尽くしていると、追つてきた同行者がゲートの前でカメラを構えようとしたその瞬間、警備員さんの声が響く。原子炉建屋が写るアングルでの撮影には、許可が必要なのだそうだ。

一九八二年にマーガレット・サツチャヤが来館したときの記念植樹だという植え込みを横目で見ながら入館。受付で代表者の氏名、住所、電話番号を記帳する。受付の女性にこの施設について訊ねたところ、一九六四年に開館、一九九三年にこの場所で再オープンしたのだという。すなわちことしは、リニューアル二〇周年

年という節目の年にあたるわけだ。

答えていただいたお礼もそこここに、「原子力展示ホール」という展示コーナーに入る。さすがに「テラパーク」というだけであつて、運営事業者である日本原電の会社紹介のあとは、地球環境問題がよりはつきりと前景化されていた。地球人口の爆發的増大、自然環境の悪化、エネルギー資源の有限性と発電方法の「ベスト・ミックス」による有効利用を訴えていく語りの内容はここでも同様である。だが、展示自体はパネル解説が中心で、情報量（＝文字数）も多く、文字のサイズも小さくて、短時間ですべてをフォローできるようなものではない。

その中で、一つ目についたのは、「エネルギー劇場」と題された仕掛け展示である。ボタンを押すと、石炭くん、石油くん、天然气くん、水力ちゃん、原子力くん、太陽くんが順番に出てきて、まるで小学校の学級会での話し合いのように、それぞれの発電工エネルギーとしてのメリットをアピールし、他のデメリットを言い立てる。ここでも紅一点なのかと半ばあきれて見ていたら、先生役の地球が登場、成人男性の声で「それぞれの個性を生かして電気を作ればよい」と教え諭し、みんなで力を合わせてがんばろうという予定調和の大合唱が始まつていくのである。あまりのことにもう一度見てやろうと再度ボタンを押し、メモをとりながら声を追いかけていると、わたしの後ろで、子どもたちが元気いっふいに叫んでいる。どうやら、この施設の中では「隠れん坊」しているらしい。

じつはこの施設、核にまつわる展示スペースは、全体のおよそ三分の一ぐらいでしかない。あとは地域の人たちの作品展示、名

產品の紹介、茨城県の觀光地紹介などのコーナーがあつて、あとは、子ども向けのプール「ジャブジャブ池」や、芝生を敷き詰めた公園（ジャングルジムやログハウス、砂場などがあつた）なのである。

八月の下旬、東京より涼しい風が吹くとはいゝ、まだまだ強烈な日差しが照りつけたこの日には、プールは水遊びに来た親子づくりでごつた返していた。子どもたちどうしが館内で走りまわり、別に展示物を使うではなく遊んでいるそのすきに、おしゃべりに興じる母親らしき人たちのグループや、職員と顔見知りなのか、親しげに互いの近況を報告しあつているような様子も見られた。ここがどこかを忘れることができさえすれば、何とも微笑ましい触れあいの光景。しかし、申し訳のように片隅に置かれた福島第一原発の事故対策を説明するパネルが、わたしを現実に引き戻してくれる。

点検中とはいゝ、ここは原発敷地の内側である。「テラパーク」の屋上からは、廃炉になつた東海原発と、薄いグレーのベンキを塗られた東海第二原発の建屋がすぐそばに見える。建屋の前のロータリーには、いわゆる過酷事故対策の一環なのだろうか、赤い色の電源車が停められている。わたしが訪問したときには案内はなかつたが、ここでは原発敷地内に広報施設があるという「強み」を生かして「テラパークで一応の知識を得たうえで、その足でただちに原子力発電所を見学できる」コースも設定されていたという⁽³⁾。

原子炉建屋から二〇〇メートルもないだろう場所で、子どもたちと親たちの楽しそうな声が聞こえてくる。地域のコミュニティの戦略的拠点なのである。

4 核を〈見せる〉語り

東海村の例を見てもわかる通り、核関連広報施設は、それぞれの地域において、必ずしも展示物に依拠しないかたちでの広報活動を日常的に展開している。ただし、あくまで展示の内容と語り方という点で言えば、今回訪問した三つの施設の展示には、差異性よりも共通性の方が目についた。

たとえば、基本的なコンセプトとしての地球環境問題の強調である。もともと核をめぐる広報は、使えるものは何でも使うといふ貪欲さを特徴とする。一九八〇年代には「オイル・ショック」以後という情勢認識を踏まえ、石油資源の枯渇と省エネルギーの必要性が掲げられていたが、一九九〇年代になると地球の気候変動が大きく取りあげられ、資源の有効利用とエコロジーの語りが前景化されるようになる。だが、いずれの場合でも、個人や地域社会のレベルではどうにもならない国家規模・地球規模の大きな危機を提示し、その〈危機〉に対処するためには、核の力がどうしても欠かせない、という訴え方が採用されている（現在ならばさしつめ、日本経済の危機と生活レベルの維持ということになるのだろうか）。すなわち、〈背に腹は代えられない〉から〈致し方

このようなアピールを語り方の面で支えているのが、「比較による相対化」の手法である。発電を可能にするエネルギー資源の説明にあたっては、ほぼ必ず、どの方法にもメリットとデメリットの双方がある、と語られる。だが、ただ箇条書きふうにメリット／デメリットが列举されるだけなので、つまるところ見る者は、「どの発電方法にもそれなりに問題がある」ということだけが印象づけられる。この語りは、いかにも公平性・中立性に配慮しているよう見える。しかし、とりわけ「デメリット」とされたことがらには深く立ち入らないことで、より具体的には核につわる事故の不可逆的かつ長期的な被害とコストにはあえて言及しないことで、「原子力」を一つの選択肢として登録していくのである。言い換えれば、「原子力」を選ばないという選択肢を消去している。

また、これらの展示が、明らかに子ども世代をターゲットと考えていることにも留意すべきだろう。施設ごとのマスクコット・キャラクターの存在（六ヶ所PRセンターの入口にも、「ツカッテモ、ツカエル君」という作業服姿のカエルがいた）や、一問一答のクイズやゲームの大がかりな採用など、おそらくは小学校高学年から中学生ぐらいの年代と、子どもにかかる大人たちを意識した展示になつていて、原子力科学館に特徴的だった宇宙・科学・未来の節合もこの文脈で理解することができるが、重要なのは、科学技術の負の側面や「原子力」の抱える問題にかんしては、ほとんど触れられないことである。先の指摘とも関係するが、プルトニウムの強毒性や高レベル放射性廃棄物の最終処分問題に立ち入つた展示はわたしの見る限りなかつたし、核と軍事技術との関連を

掘り下げるような展示も見当たらなかつた。科学はつねに発見と進歩のモードで語られ、科学の社会的責任や倫理性にかかる問題提起的な記述を見つけることはできなかつた。温室効果ガスを中心とする地球環境問題に対する強い警鐘に比べると、論点の偏りを感じざるを得ない。

ちなみに、今回訪れた三つの施設は、いずれも一九九〇年代以降に建設されたか、大幅な展示の変更がなされている。六ヶ所原燃PRセンターは一九九一年開館、二〇〇九年展示改装、原子力科学館は一九七七年に開館、一九九六年と二〇一〇年に展示を更新している。東海テラパーカが一九九三年に改装を行つたことはすでに述べた。他にも、たとえば中部電力のPR展示館「でんきの科学館」は、二〇〇六年のリニューアルにあたつて、「従来のテーマである「電気」や「科学」に「地球環境」や「エネルギー」を加えるとともに、ゲームや映像「科学や自然エネルギーの実験キットを充実させるなど、子どもたちがより楽しみながら学んでいただけた科学館に生まれ変わりました」という説明が付されたいた⁽⁴⁾。二〇一一年五月に閉鎖された東京電力の電力館でも、同様のコンセプトで展示構成がなされていたという（中尾麻伊香氏のご教示による）⁽⁵⁾。

担当の国務大臣が署名する『原子力白書』の緒言で、地球環境問題への言及が始まつたのは一九八九年。今西憲之+週刊朝日取材班『原子力ムラの陰謀』（朝日新聞出版、二〇一三）は、旧動燃関係者の内部資料から、チエルノブリ事故後の一九八八年、電気事業联合会内部で「原子力広報担当常務会」が設置され、加盟九社（当時）の広報戦略が話し合われていたことを明らかにした。

日本原燃、日本原電と電力各社との密接なつながりを考えれば、今回指摘した広報施設の展示の共通性について、さらに確認をしていく必要があるだろう。

当然ながら、展示の内容と語り方は、核をめぐる広報の特異性とも密接にかかわる問題である。よく言われることだが、「原子力広報」には、いわゆる一般の P.R. (public relations) 活動ではなく、P.A. (public acceptance) という文言が使われる。すなわち、宣伝を通じた認知と理解ではなく、核にかかる施策や事業や施設の存在をいかに受け入れさせ、同意させるかが課題となる。東京電力で長く広報関係部局に関係した人物のことばを借りれば、「原子力の広報は一般の広報と違い、『世論獲得競争』である」のだ⁽⁶⁾。だからまさしくプロパガンダなのだが、興味深いのは、核の広報に携わる側の言説に、反対者たちのメッセージの創造性と訴求力に対する強い危機感が滲み出ていることである。少し資料調べれば、とりわけ女性や子ども、教育現場を意識した「原子力広報」の必要性を語る記事をいくつも見つけることができる。

一九九九年九月に、当時の通産省資源エネルギー庁公益事業部長の私的懇談会として設置された、原子力広報評価検討会という仰々しい名前の組織が一年に及ぶ議論の報告書を公表している。何ともややこしい位置づけといい、ワーキング・グループにずらりと核関連の公益法人関係者を揃えたメンバー構成といい、まさに核広報の官民一体ぶりを象徴するような存在だが、その報告書には、広報対象となる受け手の居住地域・性別・年齢等にもとづくセグメント化や、「リスク・コミュニケーション」の積極的導入、社会心理学的な知見にもとづくメッセージの受容プロセスの

モデル化などが、今後の課題として掲げられていた⁽⁷⁾。いかにも官僚システムとマーケティングの専門家との合作らしい提案だと見えようが、ここでの考え方には、受け手を徹底的に客体化する発想が埋め込まれていることは指摘しておきたい。ここでは、自分たちの立場への同意を調達することが、情報の受け手の側の能動性を制約し、削ぎ落とした上で、一定の結論へと誘導することとして捉えられているのだ。

そう考えると、核関連広報施設が「参加型」と称して、ゲームやクイズの形式を積極的に取り入れる理由も見えてくるように思う。ゲームはあらかじめプログラムされたものであり、文脈を欠いた一問一答式のクイズは、まさしく「問い合わせ」の占有に他ならない。〈参加〉する者に、あらかじめ設計された以外の選択肢は与えられていないのだ。だからだろうか、最新のテクノロジーを駆使して作られたのだろう六ヶ所 P.R. センターの洗練された展示空間は、とても息苦しいものに感じられた。夢や未来が語られないはずなのに、いつのまにかそれらは単一のイメージへと束ねられ、窮屈なものとなってしまっている。

六ヶ所 P.R. センターの二階には、まったく展示と関係のないオセロゲームやモグラ叩きや「黒ひげ危機一髪」など、コンピュータ・ゲームではない遊具が置かれているコーナーがあつた。この場所の存在は、展示が見せる未来のイメージに飽きてしまう子どもたちが確実にいることを物語っている。しかし、一方でそれは、そのような子どもたちさえどうにかして囮い込もうとする意志と執念のあらわれとも見なせるようだ。

注

1

「参議院議員平山誠君提出六ヶ所村再処理工場及び原子力政策に関する質問に対する答弁書」（内閣参質一七七第一三六号、二〇一一年五月二三日）。

2 「原子力の開発及び平和的利用における協力のための日本国政府とベトナム社会主義共和国政府との間の協定（日・ベトナム原子力協定）」(http://www.mofa.go.jp/motai/gaikotreaty/shomei_70.html) 第二条の「1」に規定された協力の一環として、「原子力の平和的利用に関する広報」が挙げられている。

3 「日本原子力発電・東海テラパーク～楽しんで学ぶ、原子力の発信基地～」（『原子力ｅｙｅ』47巻2号、二〇〇一・一二）。

4 中部電力広報部「Web ドラマによる広報展開——中部電力の新手法」（『原子力ｅｙｅ』52巻11号、二〇〇六年一二）。

5 東電の電力館は、二〇一一年三月二〇日に「リニューアル・オープン」を予定していた。改装後は「次代を担う子供たちをはじめ幅

広い層の方々と地球の未来について一緒に考えるコミュニケーションの広がる場」となるよう、「実写映像とCGを合成する技術をはじめ、最新技術を取り入れた体験型コンテンツや映像」を用いて、低炭素化の取り組みの必要性」を訴える展示内容となることが予定されていたという。詳しくは、東京電力ホームページ(http://www.tepco.co.jp/cc/press/11021003_j.html)二〇一三年一〇月一九日閲覧を参照。

6 横本晃章「原子力の広報活動を振り返って 新たな信頼関係づくりに向けてのダイアローグの推進を」（『ATOMOΣ』50巻9号、二〇〇八年九月）。

7 「原子力広報評価検討会報告書 検討内容の要約と施策への提言」（『原子力ｅｙｅ』47巻1号、二〇〇一年一月）。この報告書では、「電力生産地域住民層」「電力消費地域順民層」「次世代層」に「各PR館」を活用することが提言されている。